

The Learner

Doshisha International Academy Elementary School

March
ISSUE



March, 2026
Volume 165

学校における1年間と学びの深まり

月日の経つのが早いことを実感する3月です。6年生は卒業式を経て新たなステージに巣立っていきます。5年生以下は、この1年を振り返って、新しい学年の準備をする時期です。中学校生活や新しい学年への進級を控え、子どもたちだけでなく保護者の皆様も、希望と不安と若干の後悔が入り交じった複雑な思いになる時期であるかも知れません。

ところで、日本の学校では1年間の教育課程期間を「学年」と呼びます。DIA も日本の学校であり、学校教育法1条校ですから、学則では「学年」と規定しています。ただ、日常的には「Grade」を使い、G1、G2、G3…という呼び方を使っています。単に日本語を英語に訳しただけと言えなくもないのですが、「学年」と「Grade」との間には、意味合いや社会的・文化的背景にかなり違いがあるように思います。

「学年」は読んで字の如く、時間と年齢を基準にした概念ですから、少なくとも義務教育課程では6歳は1年生、12歳は6年生と自動的に決まります。年功序列の伝統が強い日本社会では、きわめて自然な発想です。

ところが、「grade」には、年齢という要素は含まれていません。辞書的意味でいえば、日本語の「学年」に当たる意味以外に、「①等級、階級、品等、グレード。②〔熟達・知能・課程などの〕度合い、程度」(研究社 新英和中辞典)という意味もあります。むしろ、こちらの方が単語としての「grade」の一般的な使い方だといえるでしょう。

「grade」には習熟度や熟達度という意味が基盤にあるとなると、単に時間が経過したとか、年齢が1年加わったというだけでG1からG2に進級するというにはならないという理屈が成り立ちます。逆に、まだ1年は過ぎていないとか、年齢が基準に達していないということ根拠に、進級を阻害されることもないことになります。

その結果、飛び級制度なども比較的自由に導入できることになるでしょう。日本では、学年へのこだわりが強いため、そう簡単には飛び級制度を導入できません。

1年間という時間や年齢という形式に縛られることなく、ひとりひとりの意欲と能力に応じて grade を決められるという柔軟な制度も魅力的ではあります。少なくとも、知識量やテストの点数を重視する評価を採用している場合は、採用の価値は高まります。むしろ、知識量や点数を重視してきた日本の教育界で、grade のような柔軟な概念を採用しないのは皮肉なことです。

DIA では「探究学習」を行っています。「探究学習」では、知識の量やテストの点数にのみこだわるのではなく、問題意識や調査・研究を重視しています。特に、調査や研究では、書籍や資料から得られる知見だけではなく、実際に見たり聞いたりすること、体験することなどが重要です。いわゆる「現場知」や「経験知」を重視します。そして、経験を積むためにはどうしても時間が必要なのです。小学校で全ての子どもたちに6年間の時間を与えるということは、子どもたちが成長し、深い学びをする上で必要な時間なのだと思います。

単語として「学年」を使うか「Grade」を使うかは、さしたる問題ではありません。発想として、年齢や1年間という形式的な側面だけを重視するのではなく、「grade」の基盤になっている習熟や熟達といった側面を意識して、6年間を通じて学びを進めることが大切です。

この1年で、時間を有効に使えたか、どれだけ多くの知見と経験を蓄積したかを振り返り、新しい「学年」で何をするかを考える3月にしてください。

校長 真山 達志



キリスト教教育

3月：赦し March: Forgiveness

「私たちの負い目をお赦してください

私たちも自分に負い目のある人を赦しましたように。」

(マタイによる福音書 6章 12節 聖書協会共同訳)

2月の半ば、「関西地区聖書科研究会」という教員研修に参加してきました。今回は名古屋中学校と高校で行われている実際の聖書科の授業を参観しながら、後方の座席について自分自身も授業を受けている感覚でじっくりと話を聞くことができ、大変良い刺激になりました。中学・高校共に素晴らしい授業でしたが、筆者は今回、高校生の授業を担当した講師を含む分団で協議に参加しましたので、この度はこちらのご紹介をします。

授業テーマは平和教育でしたが「キレイゴト抜きで平和を語れるか?」と題し、解答ありきではなく、「平和の実現」のために生徒各自が考える本音の部分を無理なく引き出した興味深いものでした。

生徒達はまず、教師がオリジナルで考えたという「戦争ゲーム」を行いました。方法は、向き合った2人がじゃんけんの要領で「親指と人差し指で拳銃の形を作り、相手に向ける。」もしくは「両手を開いて上に挙げ、非武装を示す。」のどちらかを選択します。どちらを選ぶかは本人の自由です。対になった2人が同時にこの戦争じゃんけんを行うと、3つのパターンの組が生まれます。

1. 1人は相手に拳銃の手の形を向け、もう1人は非武装で両手を挙げている。
2. 2人とも互いに拳銃の手の形を向けあっている。
3. 2人とも互いに手を挙げて非武装の状態。

このいずれのグループにも、戦争被害を表す「腕立て伏せ」というペナルティがあります。1.の非武装組(いわゆる戦争に負けた人々)は腕立て伏せ15回、拳銃組は0回。2.の互いに拳銃を向けあった人々は、それぞれ10回ずつ。3.の互いに非武装だった人々には、5回ずつのペナルティがありました。

一見、最も損なのは「相手が拳銃を持っているのに自分は非武装」の1.の人々のような気がしますが、面白いことに総合の回数で見ると1.は15回、2.は20回、3.は10回となり、最もペナルティ(つまり戦争被害)の多かったのは、互いに拳銃を向けあった2.の人々であることがわかります。

もっとも聖書科教員が作成したゲームなので、グループごとのペナルティの回数配分は議論のあるところかも知れません。しかしながら国際的な紛争が始まった場合、「相手にやられないように、こちらも拳銃を向ける。」という考え方は、結局双方が大きなダメージを被ってしまうことになるのは、今現在、世界各地で起きている戦争で実証済みです。

このゲームには当然のことながら「平和を望んでいるけれど、相手にやられるかも知れないのだから、平和を守るためにも武装はしておくべき。」という考え方の生徒が一定数おり、このような生徒は「万一相手が非武装なら、自分が一方的に攻撃する側になる。」という考えは起こさないようでした。もちろん、徹底した非戦論の生徒たちもいます。全ての生徒たちの声に傾聴しながら、この考え方の違いをどのように収集するのだろうと見ていますと、先生は最後に「自分が損をするとわかっていながら、敢えて平和を選んだ歴史的事例」を挙げていかれました。8人の人物が紹介されましたが、その中には「憎かったナチス兵を赦した」というコーリー・テン・ブーム(Corrie ten Boom)のような人もいました。

この人はオランダ人でしたがユダヤ人を助けていたため密告を受け、捕虜として捕まります。収容所の中で自分の一切れしかないパンを他人に分け続けて自身は餓死した人を見、文字通りの「奇跡」を体験して終戦を迎えたホロコーストの生存者でした。「平和主義を貫くためには、自らのうちに潜む暴力性と、平和のために命をかける覚悟が試される。そして、平和を選んだ人々は実在する。」というのが授業の骨子でした。別にこれが正しい結論、という押し付けではなく、「このような人々が実際にいるのだ。」ということを生徒たちに伝えられたのです。非武装の平和は決して「お花畑のようなキレイゴト」ではなく、現実の世界でそのように生きた人々がおり、彼らから学ぶ平和は真剣勝負そのもので、それはつまり「十字架」というキリスト教の信仰そのものであることを再認識させられたことでした。

Christian Education Committee チャプレン 石川眞弓

<お知らせ>

○ 3月11日(水)は「東日本大震災を憶える礼拝」で、3月の「おにぎり献金」はこの日に行います。今年度最後の「おにぎり献金」になりますので、趣旨にご賛同頂ける方はお子様に献金をお持たせください。

2025年度の献金先:

- ・国内: 岩手キリスト教学園認定こども園宮古ひかり、福島県の若松聖愛幼稚園、熊本県の慈恵病院「こうのとりのゆりかご」、北陸学院キリスト教センター「石川県能登半島地震支援金口」
- ・海外: 日本ユニセフ協会「ウクライナ緊急募金」・「シリア緊急募金」・「ガザ人道危機緊急募金」・「ミャンマー地震緊急募金」

覚えるべき被災地は年々増えています。年度ごとに支援先を更新し、祈りつつ献金を捧げていくことに何卒ご理解・ご協力をよろしく願いいたします。

6年生では、1月28日(水)のオープンリハーサルを皮切りに、29日(木)30日(金)にPYP Exhibitionという6年間の探究型学習の集大成の発表会を行いました。在校生、保護者の方々、教育関係者、そして受験希望者等、たくさんの皆様にご参加いただき大変感謝しております。

国際バカロレア機構が公開している資料では、PYP Exhibitionを以下のものとしています。

～国際バカロレア機構 2018年10月発行、2018年12月改訂の英語原本『The learner』の日本語版(2020年9月発行)より～

【概要】

- ・「エキシビション」は、PYPの最終年次に行われる、集大成としての協働の経験です。
- ・「エキシビション」は、児童が自分にとって意味のある問題や機会について、自らの理解を探り、記録し、共有する真の学習プロセスです。
- ・すべての「エキシビション」は、児童が主体となって設計する協働的なものです。
- ・児童が自分の「エキシビション」の計画や実施に取り組む程度は、児童および学校のPYPの経験に依存します。

【理解を披露する】

PYPにおける学習は、児童が探究を通して自分の知識、概念的理解、スキル、「IBの学習者像」の人物像をどのように発展させたかを示すための多くの公式、非公式の機会を提供します。PYPの「エキシビション」は、そのような機会の中でも特に注目に値する例です。

PYPの「エキシビション」において、児童は自分が探究することを選んだ問題または機会についての自分の理解を披露します。児童は教師やメンターの指導も受けながら、個人での調査および仲間との調査の両方に取り組みます。児童は学習の計画、提示および評価に能動的に取り組むため、「エキシビション」を通して自身の学習に対して責任をもつ能力(および行動をとる自分の能力)を発揮します。

「エキシビション」では、児童のエージェンシーとともに、PYPの各学年を通して児童を育んだコミュニティのエージェンシーも強く発揮されます。学習コミュニティも「エキシビション」のプロセスに参加し、自分と他者の人生にプラスの変化を生む国際的な視野をもつ児童の発展をサポートし、またそれを称えます。

そこで本校では、PYP Exhibitionを以下の3つで構成しました。

- ① UOI (Unit of Inquiry 探究の単元) の授業を中心に、一人ひとりが興味・関心のある分野をテーマとし、4月から探究してきたものの対話型の探究発表会
- ② 体育/宗教のコラボレーション、また音楽の授業で取り組んできたパフォーマンス
- ③ 図工、家庭科のそれぞれの授業で作成した作品の展示

1月29日(木)30日(金)当日は、玄関や廊下で図工、家庭科の作品が参加者を迎え、礼拝堂でのパフォーマンスから始まり、体育館では60通りの探究発表を行いました。原稿を元に発表し、最後に質疑応答をするような一方的な発表ではなく、聞き手と会話をしたり、反応を見たりしながら相手の理解度や興味に合わせて話す内容を変える「対話型のプレゼンテーション」を目指した探究発表では、多くの子どもたちそれぞれが自分の熱意や伝えたいことを表現できた子が多かったのではないかと思います。

最初は緊張し、なかなか話しかけられなかった子も、時間が経つにつれ、「とっても楽しい!」「終わってほしくない!」と話していたり、質問してきた初対面の方に対し、発表を作り上げてきたプロセスをノートを見せながら丁寧に説明していたりするなど、3日間の経験は子どもたちを大きく成長させました。

本校のPYP Exhibitionはパフォーマンスや発表をやって終わりではなく、Exhibition中のプロセスをふりかえることも重要視しています。週が明けた2/2(月)からはふりかえりが始まり、複数の視点でふりかえったり、プロセス全体をReflection Videoにまとめたりする活動もスタートしました。ふりかえりの中で問うた「成長したこと」の中には、6年生がこの1年大事にしてきた、「計画性」「ふりかえり」を挙げている子が複数いました。どちらもテストの点数などでは測れない「非認知能力」です。子どもたちにはこの1年の経験を中学校、そして大人になって是非とも活かしていってもらいたいと思います。





The "How" of Learning

Dear Parents,

As we look toward the final term and begin our preliminary planning for the next academic year, we want to place a special focus on the Approaches to Learning (ATL). While our Units of Inquiry provide the *topics* for learning, the ATLs are the *tools* students use to succeed. These five skill sets, Research, Social, Communication, Self-Management, and Thinking, are what allow our students to become independent, lifelong learners.

1. Beyond Knowledge: Building Skills for the Future

In a rapidly changing world, the ability to find and analyze information is more important than simply memorizing facts. Looking ahead, we aim to make these skills even more visible and central in our classrooms. Our goal is for every student to not only know "what" they are studying but to be able to clearly identify "how" they are learning it.

2. A Vision for Next Year

We are currently reviewing how we can further track and develop these skills across all grade levels in the coming year. Whether it is a younger student learning to share ideas (Social Skills) or an older student organizing a complex project (Self-Management), these competencies will be the foundation for everything we do as we move forward.

How Parents Can Help

We want to invite you to help us elevate the importance of these skills now. You can support this by changing the way you ask your child about their school day. Instead of asking "What did you do?", try asking:

- "What skill did you practice today?" (e.g., did you have to listen carefully, or did you have to find information in a book?)
- "How did you solve a problem when you got stuck?"
- "How did you work with others in your group today?"

By asking these questions, you help your child realize that the *process* of learning is just as important as the final result.

「学び方」に焦点を当てる

保護者の皆様

最終学期を迎え、次年度に向けた準備を始めるにあたり、私たちは現在「学習の計画的アプローチ (ATL)」に特別な焦点を当てています。

探究のユニットが学びの「トピック」を提供する一方で、ATLは児童が成功するために使う「ツール」です。リサーチ、社会性、コミュニケーション、自己管理、思考という5つのスキルセットは、児童が自立した生涯を通じた学習者になるための基盤となります。

1. 知識を超えて：未来のためのスキル構築

変化の激しい世界では、単に事実を暗記することよりも、情報を探し出し分析する能力の方が重要です。今後は、これらのスキルを教室でより明確に、そして中心的なものとして視覚化していくことを目指しています。私たちの目標は、すべての児童が「何を」学んでいるかだけでなく、「どのように」学んでいるかをはっきりと認識できるようにすることです。

2. 次年度に向けたビジョン

現在、来年度に向けてすべての学年でこれらのスキルをどのようにさらに記録し、発展させていくかを検討しています。低学年の児童がアイデアを共有する方法を学ぶ（社会性スキル）ことから、高学年の児童が複雑なプロジェクトを整理すること（自己管理スキル）まで、これらの能力は私たちが前進していく上でのすべての活動の土台となります。

保護者の方のサポート：

保護者の皆様へ

今から、これらのスキルの重要性を高めるために、保護者の皆様のお力をお借りしたいと考えています。お子様への学校での出来事の聞き方を少し変えてみるだけで、大きなサポートになります。「今日は何をしたの？」と聞く代わりに、以下のように問いかけてみてください。

- 「今日はどうなスキルを練習した？」（例：しっかり話を聞く練習をした？本で調べものをする練習をした？）
- 「行き詰まったとき、どうやって解決した？」
- 「今日はグループのみんなとどうやって協力した？」

これらの質問を投げかけることで、学びの「プロセス（過程）」は最終的な「結果」と同じくらい重要であるという意識を、お子様の中に育むことができます。

敬具

Chris Elsdon, PYP Coordinator



からのおしらせ

新しい門出

3月は別れの季節ですね。6年生のみなさんご卒業おめでとうございます。春のあたたかい日差しが未来を明るく照らしてくれることでしょう。図書館からは旅立ちの本を送りたいと思います。

*お話の紹介文は出版者のHPから抜粋しています。

『はじまりの日』 著者：ボブ・ディラン ポール・ロジャース アーサー・ビナード 出版社：岩崎書店



ボブ・ディランの名曲 Forever Young に、爽やかな絵が加わって、希望あふれる絵本になりました。歌える日本語訳！ボブ・ディランと関係のある人々が絵に登場しており、より彼について知ることができます。

きょうでもあしたでも、いつでもあたらしいきみがはじまります☆

<https://www.iwasakishoten.co.jp/book/b191979.html>

『リンドバーク 空飛ぶネズミの大冒険』 作：トーマス・クルマン 訳：金原瑞人 出版者：ブロンズ新社



ハンブルクからニューヨークへ小さなネズミが、大西洋を飛んだ！！

知りたがりやの小ネズミは、人間の本を読むのが大好き。天敵のネコやフクロウに狙われたり、数々の失敗をくりかえしながら、小さなパイロットは、海をこえてアメリカへと向かいます。

夢に向かって一直線！

<https://www.bronze.co.jp/books/post-106/>

『ひと言でいいのです』 編著：吉川直美 出版者：いのちの言葉社



「自分」「他者」「いま生きている場所」そして、「やがて向かうところ」—それぞれのキーワードをもとに百年以上語り継がれてきた有名なものから最近のものまで、国や時代を問わず、現代人の心を養い、育む珠玉の言葉を収録。

ふりかえりの言葉でもあり、これから先の言葉でもある、そんなひと言が詰め込まれています。

<https://gospelshop.jp/shopdetail/00000002987/>

3月の主な行事・予定

3月7日 土曜参観・学期報告会
 3月11日～3月13日 学期末カンファレンス(希望者のみ)
 3月11日～3月19日 午前授業
 3月16日 卒業式(1年生～4年生は自宅学習)
 3月19日 修了礼拝

1	日	
2	月	
3	火	
4	水	6年生を送る会・クラブ活動
5	木	
6	金	
7	土	土曜参観・学期報告会
8	日	
9	月	3/7 代休
10	火	
11	水	震災を憶える礼拝 学期末カンファレンス(希望者)(午前授業)
12	木	学期末カンファレンス(希望者)(午前授業)
13	金	学期末カンファレンス(希望者)(午前授業)
14	土	
15	日	
16	月	卒業式
17	火	(午前授業)
18	水	(午前授業)
19	木	修了礼拝(午前授業)
20	金	春分の日
21	土	
22	日	
23	月	
24	火	
25	水	
26	木	
27	金	
28	土	
29	日	
30	月	
31	火	